

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：24301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07119

研究課題名(和文)信頼概念を基軸とするカント主義倫理学の再構築

研究課題名(英文)Rethinking the Kantian Ethics based on the concept of "trust"

研究代表者

永守 伸年(Nagamori, Nobutoshi)

京都市立芸術大学・美術学部/美術研究科・講師

研究者番号：70781988

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文):本研究の目的は、「信頼」に関する以下の二つの主張を通じてカント主義的倫理学に理論的な枠組みを与えることにある。第一に、信頼の情動的理論が、カント主義的倫理学の古典的な問題に対して解決の方策を与えるものであること。第二に、信頼の概念がカント哲学の核心としての、自律という考え方と整合的であることである。これら二つの研究成果は論文集『学際化する信頼研究』(2018)を通じて公表される。

研究成果の概要(英文):The purpose of this study is to provide a theoretical framework for the Kantian ethics based on the following two claims. First, the theory of affective-based trust offers the answers to the classical problems of the Kantian Ethics. Second, the concept of trust is coherent with the idea of autonomy, which is the core of the Kant's philosophy. These two researches are published as the "The Transdisciplinary Research on Trust" (2018, Keiso Shobo).

研究分野：倫理学

キーワード：イマヌエル・カント 信頼

1. 研究開始当初の背景

18世紀の哲学者、イマヌエル・カントの思想は現在まで倫理学に決定的な影響を及ぼし続けてきた。それは理性を分かちもつ人々の生き方を等しく許容し、社会正義を実現しようとする理性主義の倫理学として、J・ハーバーマス、J・ロールズといった「カント主義」を自称する論者たちに継承されている。社会における平等と正義を、理性に基づく合意や契約によって実現しようとする理論的な努力によって、「カント主義倫理学」は現代倫理学においてなお重要な位置を占めている。

しかし他方、カント主義は「理性」と呼ばれる能力を重視するからこそ、その倫理学の構想に難点を抱えていることもまた、指摘されてきた。第一に批判されてきたのは、その形式主義である。B・ウィリアムズやS・ウルフらによれば、カント主義倫理学は社会における平等や正義といった形式的な概念を説明することはできても、社会に生きる人々の具体的な生のありようを扱うことができない。たしかに、倫理的に「よく生きる」ことを目指す人々は、理性によって等しく契約や合意を結ぶだけでなく、それぞれの人生のさまざまな目的や意義を追い求める。カント主義がこのように具体的で多様な生のありようを説明することができないならば、倫理学として重大な欠陥を抱えていることになるだろう。

第二に批判されてきたのは、関係性の看過である。A・ギバードらが論じるように、社会に生きる人々はそれぞれの目的を追い求めるだけでなく、他人と目的を共有し、自分を理解してもらってはじめて倫理的に「よく生きる」ことができる。また、N・ノディングスのように、そもそも倫理とは関係性から生まれ、倫理学は人々のあいだの相互干渉から出発すべきだと考えるケアの倫理もある。これらの倫理学の構想からすれば、カント主義は理性的な人々が不干渉であることを是としてしまっており、人々の関係性をその理論に組み込むことに失敗していることになる。

しかし、このような試みはカント主義の魅力を損なうものでもある。なぜなら、感受性はすでに徳をそなえた人々のあいだに、また共感はそのが及ぶ共同体の内に限定されざるをえないゆえに、カントの思想が本来有していたはずの普遍的な平等や正義の構想と両立しないからである。そしてこの問題はけっしてカント主義倫理学の課題にとどまるものではない。理性に基づく普遍的な倫理と、感情的な交流によって浮かびあがる具体的な生との「ギャップ」は、古代から現在に至るまで倫理学の根本問題であり続けてきた。とりわけ近年、この「ギャップ」は理性主義と感情主義の対立としてメタ倫理学、道徳心理学において最大の係争点となっている。申請者はこのことをカント研究のみならず、現

代倫理学の批判的検討を通じて明らかにした。

では、いかにしてこの対立を克服することができるだろうか。申請者はこれまでのカント研究ならびに現代倫理学の検討を通じて、「信頼」という現象に着目するに至った。まず注目されるのは、カント自身は理性と感情を必ずしも対立させていないことである。むしろカントは晩年の著作『判断力批判』において、普遍的な美を前にした感情の相互伝達が、社会に生きる人々の相互理解に貢献するという主張を打ち出している。この点について、申請者はカントの倫理学と美学の関係を分析し、「普遍的な理性的観点」と「感情の相互伝達」が両立するのみならず、後者が前者の基礎となることを明らかにした。

そしてこのような「感情の相互伝達」に内実を与え、その意義を明確にするのが信頼と呼ばれる現象である。A・バイアーをはじめ、信頼に注目する論者は人々が信頼関係において「善意の楽観」や「裏切りの失望」といった感情的交流を経験しつつ、相互理解を深めてゆくことを主張する。またR・ハーディンのように、社会における普遍的な平等と正義を実現するためには、社会システムやそれに従事する人々への信頼が欠かせないことを指摘する論者もいる。申請者はこれらの信頼研究を検討することで、信頼が人々の感情の相互伝達に根ざしながら、理性的な社会正義の基礎を築くという着想を得た。それは信頼の観点からカントの思想に新たな光をあて、理性主義と感情主義の対立という倫理学の根本問題に応答しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の二点を通じて、カント主義倫理学を再構築することである。

(1) 現在、さまざまな学問領域においてホット・トピックとなっている「信頼」の現象に哲学の観点から分析を加える。とりわけ「信頼」の内容として、行為者間の感情的交流の要素に注目する。

(2) (1)の分析によって得られた研究成果を、カント主義倫理学に適用する。従来、理性主義としてのカント主義倫理学が抱えていた諸問題を、「信頼」の概念を導入することによって克服する。

3. 研究の方法

これらの目的を達成するために、本研究は基本的には文献研究を中心とした段階的研究を行う。ただし申請者は信頼研究の知見を分野横断的に検討し、また自身の研究成果を学際的に発信するため、(a)「応用哲学会」のワークショップに代表される異分野の研究者との研究会の開催、(b)「国際カント学会」等の国内外の学会への積極的な参加による成果報告、(c)研究成果のウェブ上での公開等

の諸活動を通じて広く体系的な情報収集を行い、議論のさらなる洗練と促進を試みる。

(信頼概念の明確化)

現代倫理学において信頼がどのように扱われてきたをサーヴェイする。申請者はこれまでの研究から、現代倫理学の信頼研究を次の二つのタイプに区別することができる考えた。

(1) ホッブズの信頼

ホッブズ以来、理性に基づく契約によって相互不信から脱却するというアイデアが提示されてきた。このアイデアの成否は秩序をめぐる「ホッブズ問題」として、社会科学が取り組むべき基本的課題となっている。本研究はこの「ホッブズ問題」の現代倫理学における展開を、D・ゴートイエ等の契約論的信頼論を分析することによって明らかにする(Gauthier: *Moral Dealing* [1990])。

(2) ヒュームの信頼

他方、現代倫理学では理性ではなく、むしろ感情的交流によって信頼が結ばれるというアイデアも提示されてきた。このアイデアはホッブズの契約論に対するヒュームの批判をなぞる仕方で、A・バイアーに代表されるヒューム主義者によって主張された。本研究は、この主張を「感情主義的信頼論」として継承するK・ジョーンズの研究を批判的に検討する(Jones: *Trustworthiness* [2012])。

本研究は徹底した文献研究を通じて、これら二つのタイプの信頼を(1)理性主義的信頼論と(2)感情主義的信頼論として分析する。その上で二つの理論がけっして矛盾するものではなく、信頼という包括的現象における異なるレベルを示しているという「信頼の多層理論」を独自に提示する。

(信頼概念のカント主義への適用)

まずはカント主義倫理学の文献研究を遂行し、理性に基づく道徳性の確立によって信頼関係が結ばれるという「カント的信頼」を提示する。その上で、研究目的Aで得られた「信頼の多層理論」に基づき、そのような信頼とは異なる次元で「感情的信頼」が機能することを明らかにする。

(3) カント的信頼

信頼がカント主義倫理学において大きな役割を果たすことは多くの論者によって指摘されてきた(O' Neill: *Trust and Autonomy* [2002])。それは、普遍的な道徳性にしたがった人々の相互理解によって、信頼関係が築かれるという「カント的信頼」である。申請者はこの信頼論が「ホッブズの信頼」の依拠する道具的理性ではなく、カントの主張する道徳的理性に支えられることを示す。

(4) 多層的信頼

しかし、カント自身はそれとは異なる次元の信頼も示唆している。すなわち(a)相互理解によって可能となる信頼ではなく、むしろ(b)

相互理解を可能とする信頼のありようが、普遍的な美を前にした人々の感情的交流によって提示されている。申請者は『判断力批判』の文献研究を通じて、カントの思想に(b)のレベルの信頼が「ヒュームの信頼」と同様の仕方で見出されることを示す。

以上の段階的検討を通じて、「信頼の多層理論」がカントの思想を通じて具体化される。それは社会に生きる人々が感情的交流によって相互理解を深めながら、普遍的な道徳性を実現しようとするダイナミックな信頼理論にほかならない。この理論は理性主義としてのカント主義に寄せられる批判に対する、そして理性主義と感情主義の対立という根本問題に対する応答となる。

4. 研究成果

(研究の主な成果)

以上の研究方法にしたがって、二年間にわたって申請者は信頼概念の分析、ならびにこの概念のカント主義的倫理学への適用可能性を検討してきた。おおまかには、(1)近世哲学史における信頼の思想、そして(2)感情的信頼論の現代倫理学における意義を示すことができた。それぞれの研究成果は、(1)「ヒュームとカントの信頼の思想」、そして(2)「障害者福祉における信頼」という二つの論文に集約され、2018年に発刊される書籍『学際化する信頼研究』(勁草書房)を通じて広く公表される。ここでは、二つの論文の内容を要約することによって、本研究の成果の概略を明らかにしたい。

(1)まず、「ヒュームとカントの信頼の思想」では、ホッブズ以降の社会契約説の伝統において信頼がどのように問われうるのかが主題となる。18世紀を代表する哲学者であるヒュームとカントの思想に焦点がしぼられ、社会的秩序の形成と、その維持という二つのトピックが検討される。両者の思想からは、現代の信頼研究につながる論点も抽出される。

(2)「障害者福祉における信頼」では、信頼に対する感情論的アプローチが提示されたうえで、障害者と介助者のあいだに結ばれる信頼関係の可能性が示される。そこではまた、カント主義的倫理学における「自律」の理念と、信頼における「感情」の要素が不整合をきたすことなく、むしろ相補的な関係にあることが示される。

(研究の位置づけとインパクト)

以上の研究によって、近年、学際的にホット・トピックとなってきた信頼の概念が哲学史において位置づけなおされただけでなく、カント主義的倫理学の理論的な枠組みを通じて道徳理論上の役割を明確化されることになった。その成果は心理学者、ロボット工

学者、政治学者、教育学者、社会学者といった、さまざまに異なる専門分野の学者との共同研究「学際化する信頼研究」のプロジェクトを通じて公表、討議され、広く学際的な展望を得るに至った。書籍『学際化する信頼研究』は、この研究プロジェクトの総決算であり、今後の研究の礎をなすものとなる。

また、研究の主な成果に記した研究成果「障害者福祉における信頼」の基礎になった論文「知的障害者の自律と介助者との信頼」(『倫理学研究』、46巻)は2016年の関西倫理学会最優秀論文賞を受賞し、現代倫理学の分野においても高い評価を得ている。

(今後の展望)

申請者は以上の研究成果を踏まえた上で、次のような発展の可能性を認めている。

(1)まず、「学際化する信頼研究」のプロジェクトを通じて心理学者、社会学者と共同研究を重ねるにつれて、信頼概念の自然主義的なパースペクティブに大きな可能性を見出すようになった。具体的には、相手の期待に応えようと動機づけられ、また相手にもそのような動機があることを期待する信頼関係の特徴に、どのような進化論的説明が可能であるのかを明らかにしたいと考えている。それは、社会的協調の自然的な基盤を探求しようとする近年の自然主義的な倫理学に、信頼という現象から迫るものになるはずである。

(2)また、やはり「学際化する信頼研究」のプロジェクトを通じて政治学者と共同研究をおこなうなかで、「制度に対する信頼」に強い関心を抱くようになった。従来の哲学的信頼研究の多くは、インターパーソナルな状況における信頼の醸成を問うものであり、社会制度に対する信頼がいかにか可能であるかを十分に考察してこなかった。申請者は、社会学や政治学において蓄積されてきた制度論を援用することによって、「道徳と制度」という古典的な倫理学の問題に、信頼というやはり独自の切り口からアプローチすることができるだろうと考え、研究を進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計1件)

小山虎(編)、『学際化する信頼研究』、勁草書房、2018年(印刷中)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永守 伸年 (NAGAMORI, Nobutoshi)

京都市立芸術大学・美術学部／美術研究科・講師

研究者番号：70781988